

済州島東水（Tongsu）で採取されたマール堆積物の花粉分析

○藤木利之・林 在珠（名古屋大学大学院環境学研究科）

済州島の漢拏（Halla）山の標高 692m の東水マールで採取された 285cm の堆積物の花粉分析を行い、過去 6500 年間の植生変遷を明らかにした。分析の結果、下記の 5 花粉帯に区分できた。

CTM-1 帯（ 0- 30cm）：クマシデ属・カヤツリグサ科

CTM-2 帯（ 30- 63cm）：コナラ属アカガシ亜属・クマシデ属

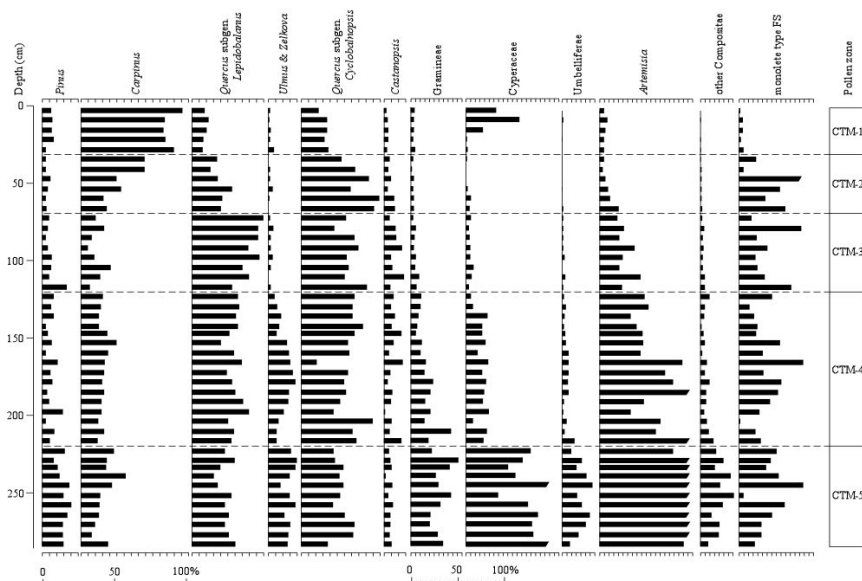
CTM-3 帯（ 63-119cm）：コナラ属コナラ亜属・アカガシ亜属

CTM-4 帯（119-218cm）：コナラ属コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属・ケヤキ属

CTM-5 帯（218-285cm）：マツ属・コナラ属コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属・ケヤキ属

約 5000 年前以前の気候は冷涼であったが、5000 年前以降はマツ属やクマシデ属、ニレ属、ケヤキ属の減少から温暖で湿潤な気候へ変っている。堆積物の乾燥密度や石英含有量が 5000 年前に減少していることから、夏のモンスーンが強くなり、中国内陸部が湿潤な状態になったとみられる。約 3000 年前にはコナラ属コナラ亜属の微増から気候がやや冷涼になったとみられる。堆積物の乾燥密度や石英含有量からも、中国内陸部が乾燥した状態になったとみられる。マオウ属の出現傾向が乾燥密度や石英含有量の傾向と大変類似しており、マオウ属花粉が黄砂とともに飛来することを考慮すれば、中国内陸部の乾燥状態を伺うことができる。

日本や韓国本土の花粉分析では、人間活動による自然植生破壊によって、マツ属が増加するが、済州島ではマツ属はそれほど増加することなく、クマシデ属が急増している。これは済州島の植生に起因するものかもしれない。



図：済州島東水マール堆積物の花粉変遷図